

言語と系統関係Ⅱ

—— Sydslesvigdansk の位置づけを考える ——

櫻 井 健

0. 導入

ユトランド（デンマーク語では Jylland ユラン）半島は、北ゲルマン語の側から見れば、南の言語から北への圧力を受け続けてきた現場である。かつてはずっと南側にあった言語境界線は、第一次大戦までの間にほぼ現在のドイツ・デンマーク国境まで北上した。このプロセスは、マクロ的に見れば（低地あるいは高地）ドイツ語の北上、ミクロ的に見れば、個々の話者の言語シフトの連続が集積した現象である。そこに両言語の干渉がさまざまなレベルで観察されたことには疑う余地がない。

この半島の中央部にあたる地域はスレスヴィ Slesvig と呼ばれ、デンマーク王家と少々複雑な関係を持ちつつ、近代に至るまでデンマークそのものには組み込まれてはこなかった。このためこの地域の集団意識はデンマーク本体とは異なると考えられている。

この地域の本来の言語である南ユラン方言 *sonderjysk* は、共通北欧語から分岐したデンマーク語からさらに13～14世紀に分岐したものと捉えられる。他のユラン方言とは多くの特徴を共有しているとはいえ、明らかに異なる部分もある¹⁾。

櫻井（2006）では、およそ1920年の国境決定までの南部スレスヴィでの言語シフトについて、中世までさかのぼって考察した。低地ドイツ語（のちに高地ドイツ語）はこの地のデンマーク語に様々なレベルで強い影響を与えてきた。言語シフトにまで至らない、言語の差が維持されている状況においても、強い影響力の作用による部分的な収束が認められることがある。以前の論点を整理しつつ、まずこの現象についての分析を1と2で示したい。

より大きな超地域的な現象からこれから述べるような部分的収束、あるいはさらに小さい局地的な現象までレベルはさまざまであるが、いわゆる

系統関係は崩されたり断絶したりする。しかしながら当事者はおそらくこのようなプロセスに巻き込まれていることに対して無意識なはずである。一般的に系統関係は「言語」「方言」といった一見明確な単位²⁾を基礎に成立している。たとえば同じ言語の方言間の干渉であれば系統関係を侵さないように見えるのである。

異なる言語の地理的に隣接する方言がそもそも系統的に近い場合、帰属は社会的動機によって恣意的に決められることがある。たとえばスカンジナビア半島最南部の17世紀にデンマークからスウェーデンに帰属変更されたスコーネ・ブレーキング地方の言語は何語の方言と考えればよいのか³⁾？

われわれはデンマーク語とスウェーデン語が系統的にごく近い言語であり、方言ではなく言語としての区別は政治的なものであることも知っている。それでも系統樹を書いてしまえばこうした背景は見えなくなってしまう。この問題については3と4で1920年以降の南ユランでの言語状況を通して考察したい。

1. 母音体系の収束

1.1. ユトランド半島における調整

北ゲルマン語と西ゲルマン語の接触はすでにヴァイキング時代からシュライ河畔の *Haitabu* のような交易地で行われていた。この時期東西と南北の経済軸がここで交わったのである。活発なヴァイキング活動、さらに12世紀半ば以降のハンザの台頭によってこの動きは強化された。

ハンザの台頭に伴って、その言語である中期低地ドイツ語はバルト海地域での威信 *Prestige* 言語としての地位を得た。この時期、現在のデンマークとドイツとの国境地域南ユランあるいはシュレースヴィヒ（ドイツ語 *Schleswig*）はヨーロッパとスカンジナビアを結ぶ重要な役割を果たしてきた。低地ドイツ語の中心地はリューベックであり、この地域の言語習慣が、ラテン語がそうであったような、法的言語のモデルともなった。

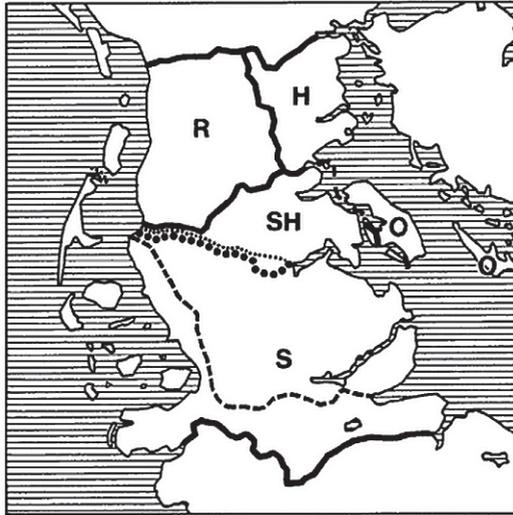
14世紀、ペストと戦禍によってデンマーク語の書記の伝統が一時的に中断したが、低地ドイツ語はその際に書記の伝統を支えた。両言語には構造的な類似性がそもそもあって、密な接触によってさまざまな面での準標準化が生じたと考えられる。もちろん低地ドイツ語およびその使用層の威信

の高さから、語形成なども含む語彙的な要素の流入は一方的であったが、形態論的な単純化や音的な平準化は必ずしも一方的というわけではなく、共通した発達と呼べる部分もあった。ちょうど低地ドイツ語が言語内的にも言語外的にも変動していた時期に接触を持ったことで、大陸の北ゲルマン語における変動も加速し、さらにそれがこの地域における低地ドイツ語にフィードバックされてくるといったプロセスが想定できるのである。パターンとしては、規模において大きく異ならない集団が大規模に接触することによる急速な調整局面、と考えられる。このような事態は、言語の系統関係にとってどのように位置づけるべきか。たしかに当該言語間の系統的関連性は高いのであるが、分岐した別の「言語」同士の接触であって、収束という点では普通の言語接触と異なることはない。たとえばドイツ語の成立史を想定する場合に考えざるを得ないような状況、すなわち一度分岐した言語が再び収束するようなことはあるとしても、接触状況による調整で、どちらの言語も維持されたまま変容するというパターンは、系統樹に落とし込んで表現することは困難であろう。

1.2. ユトランド南部におけるデンマーク語

現代デンマーク語は、ユトランド半島の方言であるとするユラン方言、シェラン島、フン島およびその周辺の諸島を使用域とする島嶼方言、ボルンホルム島などを含む東部方言（スウェーデン語南部方言と連続）の3方言に大分類される。本項で対象とするのはユラン方言である。ユランの各方言に共通の特徴としては、たとえばほぼ全域で見られる語末音消失を挙げることができる。

この言語の区分は宗教改革後の教区の区分にかなり影響を受けている。



Fredsted 2009b: 5

中心地ハーゼスレウ Haderslev で1542年に始まった宗教改革によってスレスヴィ／シュレスヴィヒ公爵領における教会の使用言語が次のように分けられることとなった (Fredsted 2009b) :

- S シュレスヴィヒ司教区の南部および東部地域 ドイツ語
- SH スレスヴィ司教区の北部 宗教改革後デンマーク語
- R リーベ司教区 (西海岸北部を含む) デンマーク語
- O オーゼンセ司教区所轄のアルス島 デンマーク語
- H 司教区中心ハーゼスレウ (北東部を管轄) デンマーク語

S地域のドイツ語化はここで明確な方向付けを受けた。教会の言語は子供の教育に影響を及ぼしていったのである。このプロセスはゆっくりと北上していった。

1.2.1. 現代スレスヴィ方言の母音体系

ユラン方言のうち、最南部に位置する現代のスレスヴィ方言は、二重母音を持つかどうかをおもな基準として、北・中スレスヴィ方言と南スレスヴィ方言に区分される。前者はこれらを欠くのに対し、後者はこれを持つ。ただしこの区分は、他の方言区分の基準とは必ずしも一致しない。

言語と系統関係Ⅱ

南スレスヴィ方言と標準デンマーク語の母音体系を比較する:⁴⁾

i:	y:	u:	i:	y:	u:
ie	ø:	uo	e:	ø;	o:
e:/eæ		o:/oa	ɛ:		ɔ:
	a:		æ:		
i	y	u	i	y	u
e	ø	o	e	ø	
æ		ɔ	ɛ		ɔ
					ʌ
	a		(a		ɒ)

南スレスヴィ方言

標準デンマーク語

南スレスヴィ方言のアクセント音節における短母音は、標準語の短母音にほぼ対応している。

たとえば

gik [gik]	/gik/
kiste [kesd]	/kest/
den [dænʹ]	/dænd/
mæster [mæsde]	/mæster/
mand [manʹ]	/mand/
skulle [sgulə]	/sku/
og [ɔ]	/ɔ/
lang [laŋʹ]	/lɔng/
標準デンマーク語	南スレスヴィ方言

一方上図が示すように、南スレスヴィ方言において標準デンマーク語の長母音に対応するものとしては、長母音と二重母音がある。

二重母音 /ie, uo/ は、基本的に標準語の /e:, o:/ に対応する

en [e:n]	/ien/
skole [sgo:lə]	/skuol/

/e:/ と /æ/, /o:/ と /oa/ は変種であり、それぞれ標準語 /æ:/, /o:/ に対応する。

der [dæv]	/deær/
grå [grɔ:ʔ]	/groa/

1.2.2. スレスヴィ方言における母音変化の歴史的解釈

ここでは、南スレスヴィ方言、およびその上位方言のユラン方言成立における言語史的背景から二重母音化のプロセスを考える。

デンマークの国家成立プロセスで重要な局面であったヴァルデマー一世が行ったシェラン島でのコペンハーゲン建設は、言語についてもこの島の権威の創出につながった。ただ、書記の習慣に対する影響は一気に及んだわけではなく、14世紀の段階では地方的特徴を伴った文書を排するまでには至っていなかった。ユランで記録された文書における方言的特徴は、新たな標準語の影響を受ける前段階のものと考えられる。

1.2.2.1. Flensborg stadsrat (フレンスボー都市法)

1300年頃の成立と考えられる Flensborg stadsrat⁵⁾に見られる母音は、次のように図示できる

i:	y:	u:	i	y	u
e:	ø:	o:	[e	ø	o
æ:			æ] ⁶⁾		
	a:		a		
	長母音			短母音	

これは、デンマーク語としての共通の変化を経たのちで、かつ新しい ā が前寄りに移動し /æ:/ になる前の状態と考えられる。いくつかの点で注意が必要である。

(a) 長い母音が区別して表記される場合がある。たとえば oo あるいは ð。前者は短子音の前で延長された場合に多く用いられる。saak, boort など

(b) ē, ð のかわりに ie, ou(wo) と書かれる場合がある

たとえば ien(ēn), stuor(stōr)

この傾向はデンマーク語のかなりの方言で見られるもので、二重母音化がすでに生じていつか、あるいは生じつつあったことを反映するものと推測

される。

(c) 長短問わず a/o が交替する場合がある。

たとえば swō/ swā, all/ olt, tharf/ thorf

これについては次のような背景を考えることができる。

- ・長い ā は後舌で上がりつつあり、その結果、もっとも低い後舌の ō が ā と混用される。

- ・o が下がってきたため、a と o の音価の区別がされにくくなった。

(d) ā と æ, ē と æ が交替する場合がある。

たとえば hwānnær/ hwænnær, rēt/ ræt

これらのペアはそれぞれ混用されていた。ē が二重母音化する傾向を含めて考えると、ā が前舌寄りに移動しつつ持ち上がり、押し上げられた æ と ē が接近する状況を想定できる。1.2.3. で述べるように、デンマーク語の母音体系はそのようなプロセスを経ている。

1.2.2.2. 南スレスヴィ方言の二重母音

南スレスヴィ方言への変化は、広範囲の語末音消失と二重母音化に特徴づけられる⁷⁾。二重母音化は ē と ō という中段の母音で生じている。この二重母音化はコペンハーゲン方言では実現しなかったので標準語には現れてこないが、デンマーク語域のかなりの部分に及んでいた時期がある⁸⁾。

二重母音化を経て南スレスヴィ方言の長母音は、次のような体系を持つにいたった。

i:	y:	u:
ie	ø:	ou
æ:		ɔ:
	a:	

のちの標準語とのこのような差異は1300年くらいから記録に現れたもので、おそらくは13～14世紀に生じたと考えられる音節の再編成と同時に生じている。標準語と南スレスヴィ方言の母音の長短は音韻論的には一致していることから、南スレスヴィでの音価の変化は二重子音が短縮される。前に生じたこと、かつ二重子音の短縮はのちの標準語と平行的に経験したことが示唆される。

1.2.3. 標準デンマーク語

現代標準デンマーク語では母音の音価よりも長さが重要であり⁹⁾、この点で他の北ゲルマン諸語とは一線を画している。北ゲルマン諸語では、1250年頃から子音の長さが弁別的になった Great Quantity Shift と呼ばれる時期があった。この時期短母音を含む閉音節では、母音か子音の延長が起こり¹⁰⁾、一方で長母音と二重子音を含む音節は短縮された。デンマーク語では、延長された子音を含む場合にこの音節が短縮される傾向が14世紀に顕在化し、結果として子音の長さは弁別に寄与しない、つまりは母音の長さのみが弁別に寄与するようになった。

そもそもデンマーク語では、短いアクセント母音を含む単音節語での母音の延長はあまり徹底されなかった¹¹⁾。それでも延長された母音のうち、a は前舌方向に移動した¹²⁾。一方本来の長母音 a は後舌方向に移動している。この変化はノルウェイ語とアイスランド語で先行して生じ、デンマーク語、そしてスウェーデン語に至ったのは1350年頃と考えられる (cf. Haugen 1984: 262)。

こうした一連の現象は次のようにまとめられる；

- (1) 延長された a が前寄りに移動する。
- (2) 本来の /a:/ が後方へ移動する。

この変化は13～14世紀に起きたものと推測される。

1.3. ユトランド半島における低地ドイツ語

現代デンマーク語の地域と陸続きに接しているのはドイツ語地域と北フリジア語地域である。歴史的に明らかにデンマーク語に影響を与えてきたのは低地ドイツ語、のちに高地ドイツ語である。北フリジア語群は孤立して現代語へと発達し、外部に強く影響を与えたとは考えられない。低地ドイツ語域のうち、北低地方言域は、最初に言語境界線が形成されたときから途切れることなく北ゲルマン語と接している。

前項では、現代デンマーク語の南スレスヴィ方言における強勢音節の母音変化を扱った。本項前段では強勢音節の母音を基準として低地ドイツ語北低地方言の分類を試みる。後段で、ここに見られる母音変化プロセスが、デンマーク語スレスヴィ方言との関連性をもちうるのかを考察する。

1.3.1. 低地ドイツ語北低地方言

低地ドイツ語は、中世後期にヨーロッパ北部を中心として、広い範囲で通用性をもっていた。この時代にはハンザ同盟による北ヨーロッパにおける商業活動の支配がなされ、共通言語として中期低地ドイツ語が書記においても広く用いられていた。低地ドイツ語では、動詞の現在形複数語尾を基準として東部・西部方言の大分類がなされる。西部方言では *-et* 東部方言では *-en* となる。西部方言は古期低地ザクセン語（低地ドイツ語）を継承するものであるのに対して、東部方言は東方植民に伴って拡大した方言域である。中期低地ドイツ語もさまざまな方言的差異は観察されるが、残されている文献資料の大部分は北低地ザクセン方言で書かれたものである。なぜ北低地ザクセン方言かといえば、この方言域がハンザ主要都市を多く含む地域と重なっていたことによる。北低地ザクセン方言は低地ドイツ語西部方言の下位分類であり、ここにはそのほかに西ファーレン方言、東ファーレン方言の2つが含まれる。

ハンザの中心であったリューベック市の言語は、植民者の移住元によって規定されていた。具体的には、優勢なザクセン方言に低地フランケン方言の話者が加わってここで混交し、新しくリューベック市の方言を基礎とした中期低地ドイツ語の書記言語が形成されたのである¹³⁾。東方植民者の方言の継承である現在の東部低地ドイツ語東部方言の基礎も、またリューベックを中心とした方言に置かれていたと考えられる。

現在の低地ドイツ語北低地方言は、中期低地ドイツ語北低地ザクセン方言を継承している。北低地方言の下位分類のうち、東フリースラント、シュレースヴィヒの両方言は、18世紀以降にそれぞれ東フリジア語、デンマーク語南スレスヴィ方言からドイツ語化した地域の方言である。したがってそれ以外のオルデンブルク、エムスラント、北低地ザクセン、ホルシュタインの各方言こそが、より厳密な意味で北低地ザクセン方言を継承しているといえる。

1.3.2. 低地ドイツ語北低地方言

低地ドイツ語北低地方言は、いくつかの一致しない等語線を用いて分類できる。

a. エムスラント方言と北低地ザクセン方言以外では語末音消失が見られない。

b. エムスラント方言は、他の方言と異なり、長い a を 2 種類持つ。(西ファーレン方言と共通する特徴である)

c. ホルシュタイン方言とシュレースヴィヒ方言以外では語末の二重母音化が見られる。

d. 後に低地ドイツ語化する東フリースラント方言とシュレースヴィヒ方言では、動詞の三人称複数現在形の語尾が -en であり、他の地域 (-et) とは異なる。

これらの特徴をもって、6つの下位方言を分類することが可能である。

d. の語尾 -en が東部方言と共通することには注目すべきである。前述のようにシュレースヴィヒ方言の成立はデンマーク語ユラン方言からの、東フリースラント方言の成立は東フリジア語からの言語シフトが密接にかかわっている。これらの言語シフトが完成する時期、低地ドイツ語から高地ドイツ語への移行も進行しており、これを考慮しないわけにはいかない。もちろん -en は高地ドイツ語の語尾でもある。

とにかく、上記の基準に従えば、他の方言との差異がもっとも大きいのがエムスラント方言であり、シュレースヴィヒ方言がこれに続く。東フリースラント方言、北低地ザクセン方言、ホルシュタイン方言が同程度、オルデンブルク方言がもっとも典型的な北低地ドイツ方言ということになる¹⁴⁾。

ê の二重母音化という基準で分類すると、東フリースラント方言、エムスラント方言、ホルシュタイン方言のグループと、オルデンブルク方言、シュレースヴィヒ方言のグループとに分けられる。北低地ザクセン方言は中間的である。ô についてもホルシュタイン方言を除けば、ê と同様であり、これは上に示した等語線による分類とは異なるが、ドイツ語化によって成立したシュレースヴィヒ方言(およびオルデンブルク方言)には二重母音化がまったく見られない一方、隣接するホルシュタイン方言には明確に認められることから、言語シフトにかかわる現象であることが示唆される。

等語線による分類では、もっとも典型的な北低地ドイツ方言であったオルデンブルク方言は、標準とかなり異なるシュレースヴィヒ方言との高い共通性を示す。上述の特徴を考慮して考えれば、ユトランド半島における方言の特徴を継承しているのはホルシュタイン方言だといえるだろう¹⁵⁾。

1.3.3. 古期低地ドイツ語

古期低地ドイツ語の長母音体系は、Cordes & Holhausen (1973) によれば、次のように再建される。

i:	y:	u:
e:	ø:	o:
ɛ:	œ:	ɔ:
	a:	

中期低地ドイツ語の時期にもこの母音体系はほぼ維持されている (Braunmüller 1993: 147)。これらのうち、mid-close が、現代のホルシュタイン方言では /e:/ ⇒ ei, /ø:/ ⇒ oi, ö^u, /o:/ ⇒ ou, o^u のように二重母音化している¹⁶⁾。

中期低地ドイツ語においては、/ɔ:/ (<本来の au) と /o:/ の区別はおおかた保たれてはいるものの、地域によっては融合していることもある。

また関連する中期低地ドイツ語の特徴としては、円唇母音に口蓋化 (つまり i-umlaut) が生じたことが挙げられる。古期低地ドイツ語ではこれは a のみに、のちに o と u に拡張された。この現象と後続音節の非強勢母音の弱化あるいは脱落とを関連付けて考えるのは不自然ではない。14世紀に入ると ā の変音は ē で表記される機会を得た (Krogmann 1970: 241)。a とその変音との区別が維持されることにより、e: より上の音を圧迫し、一方では本来の a: を後舌方向へ移動させる動機にもなる。これによって後舌の系列にも前舌と同様に圧迫を受ける可能性が生じた。

ここで低地ドイツ語北低地方言ホルシュタイン方言の二重母音化を生じさせた前提を整理してみると、

- (3) 口蓋化により、/e:/ の下に ā の i-umlaut が現れた。
- (4) /a:/ が後舌寄りになる傾向が強まる。

前項で示した南スレスヴィ方言で二重母音化を出現させた動機を再掲すると、

- (1) 延長された a が前寄りに移動する。
- (2) 本来の /a:/ が後方へ移動する。

このほとんど同じ環境から同じようなプロセスを経て二重母音化は生じたものと考えられる。冒頭で述べたように、この時期のユトランド半島南部は低地ドイツ語の進出により、二言語状態であった。低地ドイツ語はどちらかといえば公的生活、南ユラン方言はどちらかといえば私的生活に属しており、棲み分けが行われていた。公的生活の部分が多いということは、それだけ社会的地位が高いことを意味するから、そこでなんらかの言語変化が生じる場合、上層は他の層に対しての影響力が強く、各層に浸透しやすい。この項で示した母音の変化は、ある層の二言語状態によって生じた平準化の結果であろう。

2. 南ユラン方言とドイツ語

南ユラン方言には、標準デンマーク語あるいは他の方言で消滅してしまった特徴が残されていることがある。中心地から離れたデンマーク語の方言としては不自然な現象ではない。その一方で、低地ドイツ語からか高地ドイツ語からかを問わず、南からの多量の借用語彙が多く、この点でとくに標準デンマーク語との差が大きいことも特徴である。容易に想像できるように、かつての低地ドイツ語とはおよそ700年、その後高地ドイツ語とはおよそ400年の間、直接の接触状況にあったことがその第一の原因である。デンマーク語は標準語も含めて、そもそも他の北ゲルマン諸語と比較してドイツ語からの借用語彙が多いことが特徴となっている。地理的に南ユラン方言の地域はインタフェイスとしての役割を長年果たしてきており、そのことにより他のデンマーク語諸方言よりもさらに大量の語彙を南から借用している。デンマーク語へのドイツ系語彙の流入の重要なチャンネルとして、コペンハーゲンの言語習慣¹⁷⁾と並んで重要なのがこの南ユラン方言という言語習慣なのである。19世紀に入ると、デンマーク語からドイツ語への言語シフト圧力が強まり、独特の移行形式が生じたこともあり、現在の国境の南側では最終的に多くの地域がドイツ語化した。とはいえ力強くはないが、南ユラン方言は第一次大戦までは生き延びてきた。

そもそも低地ドイツ語と南ユラン方言は系統的に遠いわけではない。この接触によって生じた現象は、かつてブリテン島で起こった英語と北ゲルマン語の関係とその後の英語の歴史に比すことができるだろう。語彙借用や借用翻訳は接触が密であれば比較的簡単に起こる現象である。ユトラン

ド半島における接触の場合、低地ドイツ語と南ユラン方言の音的差異は小さく、調整は最小限で済んだ。したがって借用語が外来語とみなされる可能性は低いものだった¹⁸⁾。

次に挙げるような低地ドイツ語と南ユラン方言の共通の特徴は借用を促進したと考えられる；

- ・前置定冠詞
- ・語末音消失とそれに伴う形態の単純化
- ・格体系の形態的縮小
- ・音韻論的な類似¹⁹⁾

いずれにせよ、この南ユラン方言の話されていた地域は1920年の現在の国境決定によってデンマークとドイツとに分割されるに至った。それに伴って、国境より北の地域においては南からの言語的影響は劇的に弱まった。またこの国境線策定により、2つの国家語に対するマイノリティが生じた。デンマークにおけるドイツ系住民、ドイツにおけるデンマーク系住民である。

3. 南スレスヴィのデンマーク語

南ユラン方言の言語習慣も1920年に国境で2つの地域に分割された。現在では、その系統に明らかに連なるのは国境の北側のデンマークにおける言語習慣のみである。一方、国境の南側すなわちドイツ国内では実態としての南ユラン方言はほぼ消滅している (Fredsted 2009: 10-11)。現在ここでドイツ語と並んで用いられているのは標準デンマーク語でもなく、南シュレースヴィヒデンマーク語 Sydslesvigdansk/Südschleswigdänisch 以下 SyD と呼ばれるドイツ語とデンマーク語の接触という環境に依拠したデンマーク語の変種である²⁰⁾。ドイツ語を解さないデンマーク語話者にとって南シュレースヴィヒデンマーク語は、すべて理解できるわけではない。SyD は伝統的な方言あるいは社会方言とは異なる。ドイツ語との二言語使用を前提としておりドイツ語に強く影響されているが、ドイツ語と混成した言語でもない。標準デンマーク語に近いが、明らかな変種でもあり、その違いは意味的な部分のほかは、音、プロソディの部分で区別されるのみといってよい (Fredsted 2009;12)。他の多くの少数言語と同様、SyD は支

言語と系統関係II

5. SyD Hvor meget har han haft?
デンマーク語 Hvor meget har han fået (: drukket/spist)?
 få 得る (drikke 飲む spise 食べる)
6. SyD Bilen springer ikke an.
デンマーク語 Bilen vil ikke starte.
ドイツ語 Der Wagen springt nicht an.
7. SyD Jeg søger mig selv én ud. ”
デンマーク語 Jeg vil gerne vælge én selv.
ドイツ語 Ich suche mir selbst einen aus.
8. SyD Kan du besørge mig noget papir?
デンマーク語 Kan du skaffe mig noget papir?
ドイツ語 Kannst du mir etwas Papier besorgen?
9. a. opklæber = dt. Aufkleber ステッカー
 b. kogerecept = dt. Kochrezept 調理法
 c. husmester = dt. Hausmeister 管理人
 d. benzinkanister= dt. Benzinkanister ガソリン携行缶
10. a. TÜV = ドイツの Technischer Überwachungs-Verein
 から
 ⇒ 車検
 b. landdag = ドイツ語 Landtag 州議会から
11. a. Finanzamt 税務署
 b. Steuerberater 会計士
 c. Grundbuchamt 土地登記所

Braunmüller (1991: 26) によれば、これらの例は次のように分類できる。

- a. 1-3 ドイツ語を知らないと理解できないいわゆるドイツ語風
b. 4,5 デンマーク語を外国語として学ぶ人に見られるような間違い

- c. 6-9デンマーク語の表現に似ているが標準デンマーク語の他の方言には見られない南スレスヴィ語風 *sydslesvigismer*
- d. 10b デンマーク語に対応する語のないもの
10a, 11 ドイツ語からの直接引用。このタイプは多数派言語からの少数言語への干渉に特徴的なものである。直接のコミュニケーションが誤解なく行えるようなショートカットのようなものと考えられる。

4.1. SyD の社会的機能

Braunmüller (1991) は、SyD のあり方について次のように述べる。「これらの標準語からの逸脱は、このマイノリティの置かれた文化的状況からのみ正しく説明できる。国境の南北にいる両マイノリティは隣接する文化への共感というキーワードで理解されよう。シュレスヴィヒにおけるマイノリティにとって、SyD はもはや言語ではなくて、精神なのである。」

「南スレスヴィのデンマーク人は、隣接する国の文化に対する共感だけではなく、言語的な側面からも喜んでデンマーク人になる。デンマーク語を話すことあるいは書くことで、どこが自分の居場所かを示すのである。つまり重要なのは、それに見合うデンマーク語の表現が見つけれなくても、SyD でもドイツ語と同じ語順を使おうとも、できるだけデンマーク語を使おうとすることなのである。標準デンマーク語の規範に正確に話すかどうかはさほど重要ではない。」

「ドイツ系の住民に、自分たちにはデンマーク人のところがある *dansksindende* ことを示すことが重要なので、そのためには同じようにデンマークのところのある人々のみが通常は理解できる言葉を話すことによって示すのが最良の方法である。」

「SyD は2つの重要な社会的機能を満たしている；SyD は、内的にはデンマークのところのある人全体にとっての自分を規定する言語として機能する。この言語は、たいていのドイツ人には直接理解できないため、住民の優勢なドイツ語からの距離を保つ手段として機能している。SyD は、グループ内にとっては自分を規定する言語として、多数派に対しては自分たちを規定するのを助けてくれるグループ言語として機能しているのである。」²¹⁾

ドイツ国内の南スレスヴィヒデンマーク語は、系統的にどのように位置づけられるべきであろうか？ SyD の置かれた状況は、現代における国

家間関係のあり方を強く反映しているものである。歴史的な状況とはさまざまな点で差異を示している。極端に言えば、言語そのものについて見る場合、系統的に SyD はなにも継承していない。過去から引き継がれたのはドイツ語に囲まれたデンマーク語使用という状況だけであって、ここから現在の SyD を取り巻く環境は新たに生じたのである。

4.2. SyD とデンマーク語の系統関係

言語の系統関係をミクロ的に観察するならば、このような現象はいくらでも見つかるであろう。ところでユトランド半島南部の言語状況をマクロ的に記述するならば、大方次のような内容になる：南からのドイツ語化プロセスを反映した住民投票の結果決定された現在のドイツ・デンマーク国境の南側では、残されたデンマーク系住民はドイツ語との二言語使用に移行した。デンマーク語は主として私的領域における言語として存続している。

一般的な記述において系統的な断絶はまったく表現されない。しかしその実態は述べてきたように新しい言語習慣の創出なのである。この言語習慣は標準デンマーク語からの分岐ではないし、過去からの継承でもない。その土地の方言から標準語の変種に移行しているという点で言語的特徴には断絶がある。一方デンマーク語を使い続けているという点で言語使用の実態として断絶は認められないけれども、言語習慣としては新しい。

見てきたように、この地本来の方言はドイツ語に強く形づけられたものであった。この地のデンマーク語とドイツ語は言語的に見て共通の地盤を持つに至っていた。それは音声体系に始まり、形態的特徴、統語的特徴、語用論的特徴、また語彙的特徴までを含むものであった。もちろん北ゲルマン語の調整のほうが圧倒的に大規模であったが、ドイツ語域から見てもこの地域の言語的特徴は調整の結果であるわけで、他の地域との差異として見えるものであった。ここで SyD が対峙するドイツ語そのものも、その調整を経ていることには注目すべきである。

国境確定後、その南側のデンマーク語は、別の環境に置かれることとなった。細かく観察すれば、世代間の断絶など特定の移行に伴う複雑なプロセスがあっただろうが、最終的には、周辺のドイツ語の影響を強く受けた標準デンマーク語の変種を使用するという状況が生じた。今日の周辺のドイツ語に対する標準ドイツ語の影響は第一次大戦前とは比較にならない。

5. 結語

社会的・政治的なプロセスによって新しい言語習慣が生じることについては、櫻井（2008）でも議論した。本論で見てきたような系統関係の末節は、現代化のプロセスにいと簡単に飲み込まれ、消滅していく可能性がおおいにある。実際、現代の主要言語における各地方の特色は、おそらく意図的に維持を試みない場合には、最終的には消えてしまうことになる。維持を試みる主体が存在するとしてもどこまで介入しうるのか、とくに経済的に地域差別にも繋がりがかねない問題であり、倫理的な考察も必要であろう。ヨーロッパにおける地域語のあり方を考えるような場合ですら、地域語を含む社会内部のさまざまな階層構造まで含んだ議論は少ない。少なくとも言語習慣にとって、政治は決定的な打撃を与える機能あるいは能力を持つことは明らかであるのだが、だからといって（政治的に）なにもしないこともまた暴力的なのである。研究者に唯一できることは、状況をできる限り多面的に理解することのみであろう。

注

- 1) これは生じた方言差というより、そもそもの住民の歴史的成り立ちと関わる問題とも考えられる現象かもしれない。
- 2) これはある意味日本語固有の問題であるのだが、国家語のような枠組みを考えるとなく受け入れている結果ともいえる。
- 3) 近い言語間の現象は、クレオール化などで観察される現象とは違うレベルと捉えられやすいが、変化を起こしているという本質においては区別される根拠はない。
- 4) 記号は国際音声文字そのものではなくデンマーク語に最適化された DANIA を用いる。
- 5) 1284年にラテン語で書かれた法典の翻訳。最古の写本は1316年。
- 6) 北ゲルマン語東部方言では区別がなくなっている。
- 7) 語末音消失は他の方言に先駆けて生じている。
- 8) たとえば標準デンマーク語の *hjem* という語はこの現象が標準デンマーク語でも出現していたことの名残である。i から e への stress shift の結果、一般的な構造を持つに至っている。
- 9) Basbøll and Wagner 1985: 48
- 10) VC は VV-C か VC-C に延長された。どちらの型で延長されるかには地域

差がある。北ゲルマン語域の中央部では子音の延長、他地域では母音が延長される傾向が強い。

- 11) たとえば閉音節の短音節語では母音の延長は起こらないのが普通であった。韻律としての声門閉鎖音の存在がこれにかかわっていることが示唆される。
- 12) 狭母音の調音点が下がる傾向が14世紀の写本から認められる。デンマーク語の特徴である発音と綴りのズレはここに由来する。
- 13) 中期低地ドイツ語の成立そのものが、言語の混成プロセスを経ているわけで、それこそ系統関係が混濁している実例ともいえる。
- 14) 低地ドイツ語北低地方言において、中期低地ドイツ語の長母音 ê および ô がどのように出現しているのかを概観する (Stellmacher 1981, p. 64-8) :
 (1) brêf, kêse (2) klêt, flês, (3) klêne, sêzne (4) dênen, dêp, (5) blôt, dôk (6) bôm, grôt

	Ostfries	Oldenburg	Emsland	NNSachs	Holstein	Schleswig
ê (1)	ei	e:	ei	Ei	ei	e:
ê (2)	ei	e:	ei	e:	ei	e:
ê (3)	ei	e:	ei	Ei	ei	e:
ê (4)	ei	e:	ei	e:	ei	e:
ô (5)	ou	o:	ou	Ou	ou	o:
ô (6)	o:	o:	o:	o:	ou	o:

- 15) シュレースヴィヒ方言は決して統一的ではなく、その成立経緯を反映していくつもの等語線を設定することができる。言語シフトも当然大きな出来事であるが、それ以前から接触状況が続いていたことにも注意が必要である。たとえば先に述べた動詞現在形複数語尾であるが、シュレースヴィヒ南部ではその南側のホルシュタイン方言と同じ、-et という語尾を持つ。北側の -en を持つ地域とは異なる背景を持つと考えるべきであろう。-en というのは、この地域における正統であるオルデンブルク方言の移植ととらえるべきものと考える。
- 16) もっとも古期低地ドイツ語時代に上記の体系を確定できるだけの材料があるわけではない。
- 17) 王室でのドイツ語使用、コペンハーゲンのドイツ語書記局、あるいは St.Petri 地区などを挙げることができる。
- 18) まったくないかあるいは少し調整が行われる程度で、その状況は次のようなものだった ;
 ・まったく音的に改変がなされない場合

- ・南ユラン方言にない音素を、既存の音素で置き換えるような場合
- 19) 本論で述べた母音体系以外にも、子音でも同様な現象は観察される。たとえば南ユラン方言では古デンマーク語の k/g が [c, x]、b/p が [f] に変化しているが、これは確実に低地ドイツ語の影響と考えられる。他のデンマーク語方言では同じ現象が認められない一方、低地ドイツ語の明確な特徴である。
- 20) たとえば次のような定義が明解でわかりやすい。højsproget, die Hochsprache, dvs. rigsdansk med de sydslesvigske tillem্পinger og særeegenheder.
「南スレスヴィ風の改変と特徴をもった標準語、Hochspracheつまりデンマーク国語」(Christophersen 1985: 5)。
- 21) 一方、国境の北側においてデンマークに帰属することになったドイツ系住民の言語習慣はどのように変化したとえば、彼らもまた二言語使用を前提とする習慣を持つに至っている。彼らの言語は北シュレースヴィヒ南ユラン語 Nordschleswigsønderjysk と呼ばれている。彼らの母語ドイツ語からの強い影響下にあるのは当然とえば当然であろう。

参考文献

- BASBØLL, H. & J. WAGNER. 1985. *Kontrastive Phonologie des Deutschen und Dänischen*. Niemeyer: Tübingen.
- BRAUNMÜLLER, K. 1991. Sydslesvidansk — et Blandingspreg? in *Mål og Mæle* nr.4 13. Årgang: p. 24–8.
- 1993. Zur Entwicklung des niederdeutschen-skandinavischen Sprachkontakts. Untersuchungen zur Transferenz anhand von volkssprachlichen Textes des 15.,16. und 17. Jahrhunderts — eine Projektübersicht, in K. Braunmüller and W. Dierks (eds.), *Niederdeutsch und die skandinavischen Sprachen I*. (Sprachgeschichte 3). Carl Winter: Heidelberg, 9–40.
- CHRISTPHERSEN, H. 1985. *Det Danske Sprog i Sydslesvig*. Rostras: Sorø.
- CORDER, G. & F. HOLTHAUSEN. 1973. *Altniederdeutsches Elementarbuch*. Carl Winter: Heidelberg.
- FREDSTED, E. 2009 (a). Wenn Sprachen sich begegnen - Deutsch in dänischen Sprachvarietäten, in STOLZ, Ch. ed., *Unsere Sprachlichen Nachbarn in Europa*. Brockmeyer: Bochum, 1–18.
- 2009 (b). Sprachen und Kulturen in Kontakt — deutsche und dänische Minderheiten in Sønderjylland/Schleswig, in STOLZ, Ch. ed., *Die autochthonen Minderheiten- und Regionalsprachen Deutschlands*. Brockmeyer: Bochum, 1–24.
- HAUGEN, E. 1984. *Die Skandinavischen Sprachen*. Buske: Hamburg.
- KROGMANN, W. 1970. Altsächsisch und Mittelniederdeutsch, in E. Schmitt (ed.),

言語と系統関係Ⅱ

- Kurzer Grungriß der Germanischen Philologie Bd.1.* de Gruyter: Berlin, 211–52.
- STELLMACHER, D. 1981. *Niederdeutsch.* Niemeyer: Tübingen.
- 櫻井 健. 2006. 「ユトランド半島の言語接触と言語シフト」『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』38. 189–214.
- 2008. 「言語と系統関係Ⅰ」『愛知県立大学外国語学部紀要（言語・文学編）』40. 251–274.